

Chapter

5

ジェンダーと人権

人権問題の最前線

—どこから読んでもかまいません—

あなたの性と生について

—あるいは自分らしく生きるということについて—

新ヶ江章友(大阪市立大学人権問題研究センター／都市経営研究科准教授)

セクシユアル・マイノリティとは

大学は高校までと違い、自由な時間がたくさんあります。その自由な時間を使って、皆さんはおそらく、高校までには考えなかったようなことを授業やサークル活動などを通して学んだり、経験したりするでしょう。そのような自由な時間の中で、「自分のこれからの人生はどうなっていくんだろう」と漠然とした不安を感じる人も出てくるかもしれません。そして、恋愛をはじめとした人間関係や自分の性について悩むこともあるでしょう。今日は、誰もが直面する性の問題をおして自分の人生をどう生きていくのかを、セクシユアル・マイノリティの例を通して考えてみたいと思います。

8割にも達します(日高庸晴「ゲイバイセクシユアル男性の健康レポート2」、厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究」2007年)。つまり私たちの多くは、学校教育の中で同性愛についてほとんど何も教えられないまま大学生になったことになりました。「自分は同性愛者かもしれない」と思った小学生、中学生、高校生の多くが、学校で同性愛に関するきちんとした情報に何も触れていません。今でも誰にも言えずに悩んでいる人がいるかもしれません。

同性愛について

では実際に、自分の性と同性の人を好きになる人はどのくらいいるのでしょうか。実はこのことについて、驚くべき結果が過去に出ました。アメリカ合衆国のちよつと古いデータになりますが、性科学者のアルフレッド・キンゼイが第二次世界大戦後に人間の性行動につ

て面白い調査を行ったのが、アメリカの成人男性の37%が「思春期以降老年期までに何らかの形の明らかな同性愛によるオルガスムスに達した経験を持っている」と答えています。このキンゼイ報告によると、自分のことを「同性愛者」だと認識するかしないかにかかわらず、同性愛の経験を持ったことがある人がなんと3人に1人もいたことになりました。また、白人成人男性のうち、「生涯を通じて完全に同性愛者である」人は4%でした。つまり、同性と性的な関係を持ったとしても、自分のことを必ずしも「同性愛者」だと認識しない人も多くいるということです。同性と性関係を持ち、かつ自分のことを「同性愛者」と自認した人が4%いたということはこのキンゼイのデータは示しています。

このような調査結果を見ると、実は同性間の性的な関係は決して珍しいことではないことが分かります。19世紀末に活躍した有名な精神分析家のジークムント・フロイトは、人間の性はそもそも生まれながらにして

「多形倒錯」(つまり、性的指向が一定していない)であり、成長段階で文化的に規定された「望ましい」とされる性愛関係を学ぶことによつて、いわゆる「異性愛者」になると言います。したがつてある人が同性に性的に惹かれることがあつたとしてもそれは決して異常ではなく、誰にでもありうることだとフロイトは言うのです。また人間だけではなく、動物の世界でも、同性間の性関係は広く見られるという研究も多数存在しています。では日本においてはどうかでしょう。近年の調査によると、20歳から59歳までの日本人成人男性のうち、同性に性的魅力を感じたことがあると答えた人の割合は3・7%であり、実際に男性同性間で性的関係を経験したことがある人の割合は2・0%という報告があります(市川誠一編『男性同性間のHIV感染対策とその介入効果に関する研究』2011年)。また、2015年に電通が行つた調査によると、LGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスセクシュアル/ジェンダー)の割合

は7・6%という報告もありました。この7・6%という数字は、13人に1人がLGBTだということを示しています。13人に1人という割合は、左利きの人の数字と同じだと言われています。そう考えると、日本におけるLGBTの割合は決して低くはなさそうです。

さて、一番最初に述べたように、私たちの生きる社会は異性を愛を当然だと考え、私たちの多くが同性愛について学校教育ではほとんど学んできませんでしたが(しかし近年では、多様な家族のあり方についても、様々な教科で教育されるようになってきています)。アメリカのフェミニストで詩人のアドリエンヌ・リッチは、このような社会のあり方を「強制的異性愛」社会として批判しました。しかし日本においても、LGBTを取り巻く環境が現在大きく変わろうとしています。先ほど少し述べましたが、同性と性的関係があつた(ある)からといって、必ずしも自分のことを「同性愛者」と認識しない場合があります。その結果、同性間での性的関係を持つことがあつた(ある)としても、自分のことを「同性愛

者」と認識することなく、なかには異性と結婚して子どもを生ま、父や母になるというライフコースをたどる人もいます。しかし、このようないわゆる「異性愛者」がたどるライフコースに、違和感を感じる人もいるかもしれません。同性カップルで生活をしたいと考える場合、そのようなライフスタイルを選択して生きていくことも可能ですし、実際そのように生きている人たちも今ではたくさんいます。なかには同性同士で子どもを育てている人さえいます。最近では、行政も同性パートナーに対して異性婚と同等の支援を行おうと動き出しているところもあります。国政においても、同性婚について党派を超えて議員たちが議論を始めたところがあります。

同性同士の ライフスタイルの創造

LGBTの人たちが日本にも

たくさんいたにもかかわらず、これまでロールモデルとなる人たちがあまりいませんでした。同性同士で生きていくというラ

イフスタイルの創造は、これから日本でも進んでいく可能性があります。同性と性行為を行うから「同性愛者」なのではありません。「同性愛者」として生きていくことは、その個人が今までこの社会にはなかった生き方を発明することなのです。フランスの哲学者ミシェル・フーコーは、このことをもつて「懸命にゲイにならなければならぬ」と言っています。人と違う生き方を発明するのは、お手本がない分、分からなかったり辛かったりするかもしれないかもしれませんが、「異性愛者」の人たちが体験しないような面白い生き方を創造していくこともできるのです。きっと仲間はあるあなたの周りにもいますし、あなたが自分の性を通してどう生きたいかを真剣に考えてそのように生きていけば、あなた自身も変われるし、あなたの周りも変わっていくことができるということです。人間の生き方は多様であるということを、ぜひ大学で学んでいただければと思います。

ドメスティック・バイオレンスは女性と子どもの生きる力を奪っていく健康問題

友田 尋子(元大阪市立大学医学部看護学科教授・甲南女子大学看護学研究科教授)

◎DV (Domestic Violence: ドメスティック・バイオレンス)とは何なのですか
我が国では、ドメスティック・バイオレンス(以下、DV)を男女の親密な関係の間における暴力、権力や支配力を行使する暴力と称し、被害者の多くが女性ですが、男性等の人々も被害者になります。DVについては、2001年に制定された「配偶者からの暴力の防止及び被害者に関する法律(DV防止法)」で「配偶者(婚姻の届出をしていない事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む)からの身体に対する不法な攻撃であつて生命又は身体に危害を及ぼすもの」と定義されています。DV防止法の冒頭で、DVは女性への人権侵害であり男女共同参画を遮る行為であると述べられています。アメリカでは、親密な関係の者同士の暴力をIPV(Intimate Partner Violence)と称し、婚姻関係、元婚姻関係、現在同棲関係(していた、交際相手(日本ではデートDVと称している)、同性愛者も含めて)います。

暴力のパンデミックであり保健医療の取組を早急に行うべき事案と発表し、女性の基本的人権を脅かす重大な犯罪であると認識されるようになりました。そして、国連世界人権会議で「女性に対する暴力の撤廃に関する宣言」が1993年に採択され、その後に女性に対する暴力は早急に取り組むべき国際問題であると認識され、女性に対する暴力を「身体的・性的・心理的に有害または苦痛となるまたはそうなるおそれのあるジェンダーに基づくあらゆる暴力的行為であり家庭内のそれも含まれる」と国連は定義しています。我が国の改正された「児童虐待防止法」の第2条では、子どもが同居する家庭におけるDVを「児童に著しい心理的外傷を与える言動」として児童虐待の類型にあげ、DVが存在する家庭で育つ場合は子どもにとって児童虐待であるとしています。

◎DV被害者はどのくらい存在していますか
1997年に公的機関として初めて行われた東京都民男女4500人を対象にした東京都生活文化局による「女性に対する暴力」調査では、3人に1人の割合で身体的暴力を受けた経験を持つており、また2人に1人が心理的暴力を受け、5人に1人が性的暴力を受けていることが明らかとなりました。1999年から始まった内閣府調査では、女性の約20人に1人は夫から「命の危険を感じる暴力を受けた事がある」と答え、欧米の調査と大差のない結果が出ていますし、現在もその数で推移しています。その後も自治体や内閣府などの様々な調査から、5人にひとりの割合でDVに身体的暴力の被害を受けており、暴言や経済的制裁などそれ以外の虐待的な扱いを受けている場合を含めると、半数以上の家庭で夫から妻に対する何らかの暴力的支配が起こっていることがわかっていきます。

DVは個人的な出来事でも特殊なことではなく、立場の強い者から弱い立場にある者への暴力(Power and Control: 力と権力と支配)であり、日常生活に潜む関係性の問題であり、同時に社会問題です。そして暴力は健康問題です。人間にとって安全の感覚が満たされるはずの家と家庭という空間で、親密な関係の間にかかる暴力がDVなのです。法は家庭に入らずとされ、

痴話喧嘩扱いにされ、被害を声に出すことさえできなかつた長い歴史を経て、DVの実相が明らかになってきました。

◎DVは特殊な人による個人的な問題なのでしょうか

暴力は様々な形でおこり、被害者を苦しめています。それは、殴る・蹴る・突き倒す・首を絞める・引きずり回すなどの身体的暴力、意志に反して無理やりセックスを強要する・妊娠と墮胎の強要などの性的暴力、生活費を渡さない・賃金を要求する・借金を繰り返すなどの経済的暴力、保険証やパスポートを渡さない・親きょうだいつきあわせない・電話やメールの内容をすべて点検する・行動を監視する・外出を制限するなどの社会的暴力、バカ、無能、役立たずと罵る・殺してやるなど脅す精神的暴力、食事を与えない・生活に必要なものを渡さないネグレクトなど、夫婦や内縁関係といった生活を共にする親しい間柄でおこるため、様々な行為が相手を責め、屈従させ、支配するために使われるということがDVの特徴で、これらの暴力が重なってふるわれることが多く、想像を遙かに超えた被害があり

ます。傷、あざや出血のあるような場合、多くの人は緊急性と危険性を理解できません。尊厳を踏みじられるような暴力によって自尊心が低下し、うつ傾向、不安などトラウマ症状の起る場合があります。多くの人はこのような人だから仕方がないといった加害者を庇護するような被害者への二次被害となるような反応を示すことが、実は多いのです。身体的暴力を常に受けるわけではない被害者の理解には、様々な暴力が存在し、支配されることでその人の生きる力を奪われていくことに思いを馳せることが必要です。

◎DVは子どもに影響するのですか

DVの環境は子どもにとって児童虐待です。それは、暴力を目撃すること、親の暴力を阻止しようと被害に遭う、子どもも所有物と考えている加害者の多くは子どもにも暴力をふるうなどの児童虐待の被害があります。子どもにとって4つの影響があると考えています。それは、(1)子どもも母親と同様に直接的被害者になるという影響、(2)父親が母親を殴る現場を子どもが目撃するということから影響、(3)男女関係や人

との関わり方を子どもがその家族を通して学んでいく暴力の世代間連鎖という影響、(4)子どもの成長発達に保障されにくいという影響です。生まれる前にも暴力にさらされ、妊娠中の暴力被害は早産や流産を誘発すること、低出生体重児の出生の増加すること、出産時の平均体重の全般的な低下の原因であることがわかっています。それは、corticotropine releasing hormone (CRH)を上昇させ、UGR(子宮内発育遅延)児の出生を高めるからです。被害者は加害者からの暴力と恐怖をいつ起こるかかわらない状況で、孤立無援で、精神的ストレスを増大させているのです。米国では妊婦の4人に1人がDV被害者であると報告しています。早産、新生児死亡率もDV被害の妊娠はそうでない妊娠よりも多いとされています。子どもが小さいかわかっているといいた間主観性はまちがいです。このように子どもの多くは胎児の頃から暴力の危険にさらされ、安心安全の欠如、自己評価・自己価値の低下、愛着形成不全を抱えて育つことになるのです。DV被害の子どもは第二の被害者であり、多くの児童虐待の背景にDVがあるという現実は、やっ

◎暴力と支配の恐怖は、いつまでも続くのですか

やっど加害者と別居できたとしても、加害者による子どもの連れ去り、現在の生活を探り脅かすように子どもをつまわすなど、被害者、子どもたちは暴力再体験への危惧は続きます。その暴力再体験の場となるのが、2011年民法改正によって増加し、DV加害者の場合、監護権を盾にして頻繁に要求する子どもとの面会交流です。面会交流では、子どもが最大の攻撃対象となり、加害者は法的正当性を装って子どもを通じて陰に日向に家族への支配力と影響力を及ぼしていくのです。

◎どのようにすれば暴力被害の防止に参画できますか

DV被害者を発見したとき、相談されたとき、見ないふりをしないことです。子どもへの影響はなかったことにしないことです。次世代の子ども達の被害を断ち切るために、行政が中心的な軸をつくり、様々な支援機関のネットワークを官民共同でつくっていかねばならないと思います。

知らないことと想像すること

木下 衆(慶應義塾大学大学部助教)

学部生の皆さんを前に講義すると、「ああ、男性と女性で、見えている世界が全く違うのだな」と感じられる瞬間があります。僕は以前、講義の中で「風俗(店)」の話を行いました。講義を受けていたのは学部2回生の人中心、つまり皆さんと大して年齢の違う人ばかりでした。そして講義の終わりに、受講生の皆さんに、自分の体験や考えをグループごとに自由にディスカッションしてもらいました。

このとき、男子学生たちからしばしば語られたのは、「自分も(あるいは自分の知り合いも)サークルの先輩に連れて行ってもらったことがある」といった体験談でした。その上で、「性病をもらわないか心配だ」とか「だいたい何円ぐらいで利用できる」といった話を展開するわけです。

一方で女子学生たちは、「自分は街中で『5万円はどう?』などと声をかけられた」などと、全く別の体験を話してくれます。見知らぬ人から街中で声をかけられるだけではなく、例えば大学の構内で知り合い(先輩など)から声をかけられたなんて話もあります。単に声をかけられただけではなく、「断っても付け回された」なんて話もあります。

「風俗(店)」の話になったとき、男子学生は「買う側(になりうる人)」として自らの経験を語り、女子学生は「買われる側(になりうる人)」として自らの経験を語る。

そして重要なのは、男性も女性も、相手がそういう経験をしていることを知らないという点です。女子学生からはしばしば「サークルの中でそんなことがあるなんて知らなかった」と驚き(と軽蔑)の声が寄せられる。あるいは男子学生からは「女の子が街中でそんな目にあっていたなんて」と驚きの声が聴かれる。——机を並べていても、男性と女性で全く見えている世界が全く違う。

そして、講義をしながら僕が一番気になったのは、女性(の体)への想像力のなさでした。例えば男子学生達は「自分が病気をうつされないか心配だ」と話します。だけどその子たちは、「自分が相手に病気をうつさないか」心配することはありませんでした(だから当然、「自分が病気を広めないために検査しています」なんて子はいない)。あるいは、ある男の子はこうも言いました。「1時間で何千円も稼げるのだから、風俗は楽だ。ファーストフード店で時給数百円のバイトをするなら、そちらを選ぶ。」——だから、僕は(実際の講義では、もう少し露骨に言い方を変えた)「大まかに言えばこういうことを言いました。『風俗店で、1日8時間働いている女性がいます。その間、休憩をはさんで5人の客をとり、実質5時間働いたとしよう。それが週に5日続いたとして、25人。その一人ひとりから、彼女はどういう作業を求められるのだろう? その疲労が体に積み重なったとき、どういう痛みを伴うだろう? それはすごく、すごく大変だろうなど、僕は思う。そして身体に加わるその大変さを、男である僕はたぶん一生わかない。時給の話もそうだ。時給は、その労働の対価として支払われる。じゃあ、『風俗は楽だ』といったとき、女性たちの体に加わる大変さを想像しているだろうか?(あるいは、『ファーストフード店で時給数百円のバイトをするなら』という言い方にしても、『スマイル0円』の仕事の大変さを、ずいぶんバカにしているように聞こえる。)いづれにしても僕は、風俗で時給数千円出ているとしても、それを『高い』とか『安い』とは言えない。」

そして一方で、そういう女性(の体)への想像力のなさは、女子学生に対して感じること

でした。講義に参加した女性たちはしばしば、「そういう所で働く女性たちは自分とは全く別の存在」だと、蔑みを含んで発言しました。——だから、僕はこうも言いました。「しかしこの教室の中にも、街中で『いくらでどうか』なんて声をかけられた女性、付け回された女性、痴漢にあつた女性、そうやって、男性から性的な目線で見られることで、苦勞してきた人がたくさんいた。その大変さは、彼女たちが店の中で、そして町で感じていることと共通しているとは思わないだろうか？あるいはさっきの例で挙げたように、彼女たちの体に加わる大変さを想像してみたとき、誰がどういう権利で彼女たちを蔑むことができるのだろうか？」

「ここに挙げたのは極端な話ではないか？」——そう思う人もいるかもしれませんが、確かに、ここにいるすべての人が、上に挙げたような体験をするわけではないかも知れません。ですが、皆さんとほんの少ししか年の離れていない多くの人たちが、上に挙げたような経験を確かにしてきたのだということ、僕は忘れてほしくありません。僕が講義したのは、大学に入って2年もたたない学部2回生の人たちでした。彼らだって1回生の

春には、「自分が知人から風俗店に誘われて(行くか行かないか)決断を迫られる」だとか、あるいは「構内で『いくらでどう？』なんて声をかけられる」なんて、思ってもみなかったでしょう。

逆に言えば、大学入学後、皆さんも驚くほど早いうちにこういう経験をしえるわけです。大学入学後、皆さんは今までにないほど広い選択肢を手に入れることとなります。(サークルやバイトを通じた)人間関係も、お金の管理や時間の管理も、今までにないほどの自由が広がります。しかしその中で、思いがけない形で傷つき、辛い経験をしてみよう可能性もまた、広がってしまふ。

ただ、僕がこういう話を書いているのは、皆さんに「気をつけろ」と伝えたいからではありません。例えば「大学構内で望まない形で性的関係を迫られた」事例——元も子もない言い方ですが、こういう加害はいくら気を付けていても降りかかってきます。悪意のある人は、常に思いがけないところであなたを傷つけるのですから。人の信頼やそれまでの人間関係を逆手にとり、ねじまげ(セクハラのような形で)相手を傷つけてきた人たちの話を、僕は今までさげんき聞いてきました。

んは、思わぬ形で辛い目にあう可能性もあると同時に、誰かが辛い目にあつたとき、その辛さを想像する能力もまた、身につけることができる」という点です。先ほど僕は、「机を並べていても、男性と女性で見えている世界が全く違う」と書きました。特に男子学生は、女子学生があつてしまうかもしれない、あるいは既にあつてきた被害のことを、驚くほど知りません(かく言う僕だって、その恐怖はたぶん永遠にわからないわけです)。しかし講義を通じ、受講生の皆さんは、同世代の人たちがどういう経験をしてきたか、そこから何を学べるのかを(講義する側が思つても見なかったほど深く)考えてくれました。

「自分は知らず知らずのうちに相手を傷つけてきたのではないか？誰かを蔑んできたのではないか？」、あるいは「今までは被害にあう自分に非があると思つてきたけど、やっぱり加害者がおかしいではないか」——相手の経験を想像し、そこから自分の経験を振りかえる。

と——講義の中で体験から、皆さんは今までにない力を得られるはず。とはいえ世の中には、そうやって「相手の経験を想像する力」がある人ばかりではありません。先ほど、「悪意のある人は、思いがけない形であなたを傷つける」と書きました。あなたの信頼や良心を逆手にとる人間や、あなたにだけ負担を負わせて自分は楽をしようとする人間は、常にいるわけです。忘れないで下さい、「もし今の人間関係があなたを傷つけるなら、その関係を絶つて、別の人間関係を築いていく」、そんな力を皆さんは持っています。「相手の経験を想像する力」は、「自分の経験を大切にする力」にながります。「あなたに一方的に負担を負わせ、傷つける人間と付き合ひ続ける必要はない。」——このことは、何度でも確認したいと思います。

最初に僕は、皆さんが「これからの4年間で思いがけない形で傷つくかもしれない」と書きました。ただそれは同時に、これからの4年間で思いがけない形で力を——経験を語り、想像し、実り多い人間関係を作り上げていく、そんな力を——つけていくかもしれない、そういうことでもあります。



『暴力はどこからきたか 人間性の起源を探る』

山極寿一著
NHKブックス 2007年

『女ぎらい ニッポンのミソジニー』

上野千鶴子著
紀伊國屋書店 2010年

60歳代半ばの男性が、“ちゃぶ台をひっくり返したことがある”と話した。ゲームや顔文字ではない。私がおどろいて、「どうしてそんな？」と問うと、彼は「世の中にはこういうこともあると、子どもに教えておこうと思った」と、当然でしょうという表情で応えた。さらに「話してもわからないとき、ものを壊すことでわかってもらう」とも言い添えた。その人物は社会的地位にある温厚な人物であり、自他共に認めるフェミニストだった。詳細の事情は知るよしもない。しかし、“そのとき”の家族のショックを私は想像した。家族で食事中、突然食卓が食べ物ごとひっくり返される。口論やいさかいなどの何か文脈があったとしても、居合わせれば驚愕の事態である。それ以前に“恐怖”を感じるに違いない。なぜなら「暴力」だからである。

2010年11月23日の武力行使のニュースで、この数年前の「ちゃぶ台返し」エピソードを思い出した。なるほど、ちゃぶ台返しは直接家族を傷つけない。しかし、暴力のデモンストレーションである。その場に居合わせる人は確実に「食卓へ向けた“暴力”が、もし自分に向けられたら」と連想する。同時に、意識的無意識的に暴力が自分に向かわないように自らを制御し始める。暴力の示威は他者の行動を抑制する。ちゃぶ台返しする人物は、対物暴力を示すことで家族をコントロールする。国際社会でも部分的暴力である地域紛争をおこしたり、暴力行使のための武器を相手にみせつけることは、全面戦争や根本的問題解決を避け優位を維持する処方でもある。

暴力は人間社会で他者支配を実現する必要悪と見なされ、21世紀の今、政治的にも人間関係でも廃絶されていない。戦争からDVまで暴力を深く広く、そして的確に考察している書物を2冊紹介しよう。人間社会の暴力を理解しようとするとき、自分の中の未だ気づいていない自分と向き合う勇気のあるひとには『女ぎらい』をすすめたい。人類発祥以来の暴力の理由を確かめたい人には『暴力はどこから来たか』が説得力がある。それぞれの時代に社会と人々が正当と位置づけてしまう暴力があった。そんな暴力の前では人権がなんと軽視されることか。この2冊の書物を読むとあらためて痛感される。

服部 良子（大阪経済法科大学経営学部 教授）